
らせん ねじれ

◆あやこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らせん ねじれ

【Nコード】

N4006J

【作者名】

◆あやこ

【あらすじ】

ぼくと ピエロおんな。冬号部誌に書かせていただきました

200911

満月の夜十時、ぼくは惣菜を手にアパートへ向かっていた。今日の売れ残りはマカロニサラダにローストビーフ、そしてカニシューマイが三つ、いつもと比べたら豪華な売れ残りだった。ぼくの生活は、バイト先の廃棄にずいぶん世話になっている。換算したらどれくらいになるのだろう。そろそろ一人暮らしをはじめて一年を迎える。無料でいただいていることを考えるといやでもリアルな金額が浮かんでしまう。

いまのバイトを始めて三年になる。全国チェーンで展開している惣菜屋で、それなりの時給かつシフトの融通も利き、人間関係も円滑でいい職場だ。しかし同時に、思いを寄せる子と出会ってからも三年経っていることとなる。彼女、宮永さんはバイト先の近くの大学に通う学生で、ぼくより前からバイト先にいた。三年経ってわかったのはメールアドレスとそのことだけ。平行線の関係が続いていることに気づき、頬を撫ぜる風をいつそう冷たく感じた。

気がつくとアパートの前に立っていた。寒さでどうやら足早になっていたようだ。さびついた階段を上り、部屋へと向かう。ぼくの部屋の前には人影があった。細いシルエツトで、月に照らされた赤い髪がよく目立つ。それはじつとぼくの部屋のドアを見つめていた。ぼくの足音に気づいたのか、それはぼくの方を見た。茶色がかった瞳に真っ白な肌、幼いころ絵本で見たクラウンメイク、体に合っていない上に色彩の派手な衣服。まるでその姿は、ピエロそのものだった。

「あの、ぼくに何かご用でしょうか？」

ぼくは恐る恐るピエロに尋ねた。

「おなかがすいたの」

返答の声を聞き、それが女なのだと悟った。

「いや、それより、どうしてぼくの部屋の前に？」

「お兄さん、寒くはない？ 早く部屋に入らないと風邪を引くよ。お兄さんが風邪を引くのは、いやだな」

そう言ってピエロ女はぼくの左手を握った。冷たい。ぼくがどうこうではなく彼女がどうこうなのではないか、とぼくは思う。同時にいったい彼女はどれだけ待っていたのだろうかと思う。まったく知りもしない人間の家の前で。見ず知らずの人間ながら少しだけ可哀想になって、ぼくは部屋の鍵を開けた。万一余計なことをされたとしても、彼女をたたき出すことができるかと踏んだからだ。

ピエロ女はぼくの惣菜を手に取り家になると、カニシューマイだけ電子レンジに入れて、慣れた手付きで皿におかずをあけた。

「どうしてきみは食器の場所を？」

「さむいね、暖房はどこにあるの？」

彼女はまともにコミュニケーションをする気がないらしい。ぼくの質問に答えようとすらしない。ぼくは黙って電気ストーブを点けた。彼女はその前に座り、冷えた手先をストーブに当てる。

「ありがとう」

「気にしないでいいよ。それよりきみは誰？」

「わたし、夜をあそんで歩いているの。お兄さん、あそんで？」

そう言って彼女は腕を絡めてきた。密室に男女ふたりといえど、変な服装のうえにピエロ顔なものだから少しもどきどきしやしない。これがであつたならどんなに幸福だろうと思った。

「ぼくは明日大学があるんだ、むりだよ」

「あそんで、お兄さん。わたし死んでしまうわ。夜はあそんでいないと死んでしまう。」

「もっと暇をもてあましている人に頼んでおくれ。夜は眠りたいんだ」

「おねがい、お兄さんしかいないの、おねがいよ」

彼女のくちから出る「お兄さんしかいないの」は、使い慣らされた言葉のようで、いやだった。ぼくは押され気味の状況をどうにか打開しようと

「だってきみは毎晩遊んでいるんだろう？　どうしてぼくである必要があるのさ」

とそっけなく返してみた。

「はじめてあったとき、お兄さんはやさしい、そう思った。わたしだって毎晩違うひととあそびたくななんかないの。お兄さんはやさしい、そう思ったから」

それだけ、と彼女は呟いた。いつの間にか僕の右腕には彼女の両腕が絡んでいた。大きめの袖の下にある細い腕が、くっきりとその存在を主張する。それらはどう考えても常人の太さではなかった。

「きみ、ちゃんとご飯食べてる？」

「あのね、お兄さん。わたしのことを拒みたいならわたしをぞんざいに扱えばいいの。そう、モノみたいに。そうしたら『やさしくなかったね』って言うってお兄さんから離れるわ」

笑いながら彼女は言った。ぼくは反応に困ってしまった。ちん、と電子レンジが鳴る。いったん離れたくて席を立とうとしたが、二本の腕に止められた。焦げ茶色の目がじっとぼくの両目を見ていた。悲愴感の漂うまなざしからぼくはどうしても逃れられない。右腕と同じように意識が、彼女の視線に絡め取られていた。よくよく見ると目元のメイクが白い肌に滲んでいた。

「そんなことはできない。それに、ぼくから離れたらまた次の人間を探すんだろう？　それはよくない、だめだ」

「じゃあ、あそんでくれるの？　わたしをあいしてくれるの？」

彼女の視線はぼくから離れない。ただぼくだけを視界に入れていた。彼女はまっとうに愛されたことがないのだと思った。

「……愛せないよ。今日会ったばかりで、しかも会話ができない子なんか」

「お兄さん、どうやったらあいしてもらえるの？」

「……きみはあいしてもらいたいのかい？」

「そうよ、ずっとそれだけ。あそぶのはいちばんじゃない」
「ならどうして」

「わからないの、わたし。何が正しくて何がおかしいのか。あそんでっていえばあそんでもらえた。でもあいしてほしい、ってお願いは誰一人聞いてくれなかった。まっとうに愛を求めるなんてこと、ことばにしているだけで中身なんかぜんぜんわからないのよ」

彼女の目になみだが浮かぶ。ぼくはどうしていいかわからず、とりあえず彼女を抱きしめた。どうしても彼女のなみだを見たくなかったのだった。彼女は一瞬身をこわばらせたが、まもなくぼくの背中に腕を回した。長い沈黙。両者ともそれを破ろうとはしない。

なみだをこらえたか拭ったかした彼女が、ぼくを見上げた。なみだの名残をのこす瞳がじわりとピンク色に染まっている。それはみように色っぽく、同時に幼くも見えた。ぼくはほとんど衝動的に、彼女のくちびるを奪った。彼女は抵抗しなかった。遊び歩いているなら当然なのかもしれないが、それよりもっと好意的に受け入れてもらえている気がした。くちびるのつながっている間に強く抱きしめると、彼女が小さく呻いたので我に返ってくちびるを離れた。

「ごめん、いたかった？」

「いいえ。それより……つかれたわ、お兄さん。きのうから寝てないの。」

「じゃあ、寝ようか。ぼくも疲れた。」

ストーブと灯りを消して、ぼくたちはベッドに入った。いつも寝る場所より少しだけ窓側だ。背中合わせでぼくらは寝ている。他人の熱がそばにあると、こんなにも寝床が暖かくなるのだなとしみじみ思ってしまった。たとえ得体の知れない存在であったとしても、だ。さきほどよりそばに彼女はいた。背中越しに小さな、彼女の存在を感じる。小さく震えているような気がした。

「こわいの？」

「いいえ、うれしいの。こんなに話を聞いてくれたの、お兄さんがはじめて。」

「そう」

「うれしいわ。でも、わたしピエロなの。ほんとうは泣いてはいけ

なかった」

「そんなことないよ、ピエロであるまえに人間だろう？」

「そうね、そう。でもピエロなの。だからだめよ。おねがい、わたしが泣いたのはひみつにしています？　わたしが壊れてしまうから」

「わかった」

それからまた、しばらく沈黙が続いた。ぼくは心身ともに疲労していたが、うしろの存在が気にかかって眠りに就けなかった。彼女の方からは音がしない。振り返って確かめようと何度も思ったが、できなかった。だからまた、沈黙を破る形で彼女と接触を図ろうと思った。

「お兄さん」

ぼくが声を発する前に、彼女が口を開いた。先程よりはずっと落ち着いた声色だった。

「なんだい？」

「お兄さんのほうを向いてもいい？　……というよりね、もう向いているの。お兄さん、背中しか見えなくて寂しいわ。こっちを向いて」

ぼくは言われたとおり彼女の方を向いた。変わらず彼女はそこにいた。暗闇でよく見えないが、きつとその口元は笑っている。彼女はほとんどなくしてぼくの背中に腕を回して、ぎゅっと密着してきた。

「ごめんなさい。やましい気持ちはないの。ただ、こうしたいだけ」

「ほんとうにぼくでいいの？」

「わたし、虚構でもいいから今はお兄さんにすがっていたいの。つかの間でいいからわたしの、だれかにあいされたい夢をかなえて。」

……そうね、道端の老婆を助けるくらいの軽い気持ちでいい。」

ぼくは困ってしまう。見ず知らずの少女をここまで受け入れておいて、いまさら拒むことができなくなってしまったのだ。受け入れたら自分の気持ちにうそをつくことになるし、突き放したら彼女はまた、深い絶望の淵に立たされてしまう気がした。ぼくの頭に一瞬、

バイト先の――宮永さんの顔が過ぎる。彼女は微笑んでいる。ぼくは彼女の表情においては、接客のときにする笑顔しか知らないのだ。どうあがいてもその顔しか出ない。ぼくは目の前のピエロ女を抱き返した。先端は冷たかったが、からだの中心は熱がこもっていた。

「すき、こういうの、すきな。ずっと求めてた」

「よかったよ、きみがしあわせで」

「お兄さん」

「何だい？」

「キスをしてほしいの、もう一度」

『いいけど……』とぼくが返事をする前に、彼女からくちびるをうばってきた。短いくちづけの後ふふ、と彼女は笑って、それからぼくにずつとくつついていた。そのあと、小さく『お兄さん、すきよ』と囁いた。それから今まで話と同じようなことを堂々巡りのように話していた。話は驚くほど展開しないのだった。

会話の反復に飽きたのか、ぼくはいつの間にか深いまどろみの中に意識をあずけていた。気付けば朝日が差し込んでいた。慌てて時計を見る。大学には十分間に合う時間だった。

はっとして布団の隣を見た。彼女はいなかった。一瞬夢かと思っただが、シーツにメイクらしき原色がうつすら染み付いていた。

ベッドを出て部屋中を探した。昨晚の惣菜は空になっていた。どこにも彼女はいなかった。呆然としていると携帯のアラームが鳴った。もう定刻に着くには余裕がないことを告げる警告。ぼくは急いで準備をして、大学へ赴いた。大学では今まででいちばん注意力散漫だった。教室を間違えるし教科書も間違えていた。そのあとにバイトがあった。その日宮永さんは入っていなかったが、あまり落胆することもなかった。ぼんやりしたまますごしていると、いつの間にか閉店時間になっていた。昨日と同じように売れ残りを回収し、帰途に着いた。

部屋の電気を点けると、ベッドが妙にふくらんでいるのに気付いた。

いったい誰がいつ侵入したのだろうか。寝息を立てる主に近づき、ゆっくりと布団をめくった。

そこには消えていたはずの、彼女がいた。彼女というよりむしろ、宮永さんだった。メイクをおとした彼女は宮永さんそのものだったのだ。

「おはようお兄さん。今日はすっぴんなんだ、ごめんね。お風呂に入りたかったの」

「宮永さん、ですか？」

「……どうしてなまえを知っているの？」

「だってぼく、バイト先で……」

「わたし、バイト先のにんげんはわからないの。従業員番号で覚えているから。あなた、何番？」

「……十五です」

「ああ、十五番……男の子だったかしら」

「ええ。あの……ぼくのこと、知らないんですか？」

「偽りのじぶんをさらしているところで他を認識しようだなんておもわないわ。たとえそんなわたしに興味をもったにんげんがいたとしても、そこにいるわたしはからっぽのお人形とおなじ。だからわたし、あなたが昨日のお兄さんであること以外は知らなかった」

長年の平行線の関係が、一晩でねじれの関係に変化した気がした。ぼくと彼女は交わっても交わらない、矛盾した関係なのだと、そんな気がしてならなかった。ぼくは宮永さんをあいして、ピエロ女はぼくをあいした。ピエロ女が自嘲した一晩限りの虚構の愛が、べつの形でぼくの愛にもあてはまってしまう気がした。ぼくがどんなに彼女を意識しようとも、ぼくは実在する個人として宮永さんに把握されていなかったのである。三年間のうちで『十五番』という番号だけが、宮永さんとして知っているぼくのすべてだったのだ。そしてピエロ女にとってのお兄さん（としてのぼく）とだけ人間的な関係が成立していたのだった。

戸惑うぼくの気も知らずに、宮永さんは言う。

「ねえお兄さん、わたし、お兄さんがすきよ。やっぱりお兄さんはやさしかった。わたし、きのうはほんとうにしあわせだった。お兄さん、わたし、あなたとずっと一緒にいたいわ。あんなやさしさを受け入れていたいし、お兄さんにも与えたい。きのうは虚構でも、いつかほんものになるかもしれないでしょう？　そうしてほしいの、すきだから。わたし、あなたの前ではピエロでいなくってもいいと思えたの。お兄さんはやさしかった。ねえ、だから……今日もここにいてもいい？」

ぼくは、断れなかった。今まであいしてきた宮永さん、そして昨日限りのはずだったピエロ女のふたりが、ぼくの部屋にいたのだから。

ぼくは数日後にバイトをやめた。別のバイトを始めて、機械的な宮永さん知らない場所で働いている。家に帰れば生きた彼女がいる。ぼくと彼女は今、そうやってあいしあっている。三年前からあこがれた彼女は、徐々にぼくの記憶から薄れていった。今はただ愛にたいして不器用な女性が、ぼくのとみにいるだけだった。

「お兄さん、すきよ」

いまでも寝る前に彼女は、ぽつりとぼくにささやく。さいしょの晩にそうしたように、ずっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4006j/>

らせん ねじれ

2010年10月8日15時45分発行